

一、昭和天皇と関東大震災

①大震災で結婚を延期

昭和天皇は、帝都東京と日本全国とを峻別し、震災を東京という一地方に押し込める視点をとらなかった。「今回の大震災に際し其程度範囲も甚大、見聞するに従ひ傷心益々深きを覚ゆ、就ては余の結婚も今秋挙行に決定したるも之を進行するに忍びず、故に延期したしと思ふ」（『牧野伸顕日記』）との見解に明らかなように、遷都はせずに婚姻を延期する決定を下したのである。

②都市計画に関心、後藤新平を評価

この復興に当たって後藤新平が非常に膨大な復興計画をたてたが、いろいろの事情でそれが実行されなかったことは非常に残念に思っています。もし、それが実行されていたらば、おそらくこの戦災がもう少し軽く、東京あたりは戦災は非常に軽かったんじゃないかと思っ、今さら後藤新平のあの時の計画が実行されないことを非常に残念に思っています。（1983年（昭和58年）記者会見）

二、 関東大震災が造りだした昭和の東京

①破壊された江戸の名残

同時代人の馬場恒吾は単刀直入に「9月1日は赤い日であった」と記す（「震災直後」『政界人風景』）。

山本七平（『昭和東京ものがたり』）

私が生まれたのは大正10年末、昭和元年で5歳、大地震のときは2歳と9ヶ月である。もちろん記憶は何も残っていないはずだが、記憶しているような錯覚は今も残っている。これはおそらく、3歳から5、6歳まで、絶えず大震災の話聞かされていたからであろう。

②天罰か「社会革命」か

永井荷風（『摘録 断腸亭日乗（上）』）

近年世間一般奢侈驕慢、貪欲飽くことを知らざりし有様を顧れば、この度の災禍は実に天罰なりといふべし。何ぞ深く悲しむに及ばむや。民は既に家を失ひ国帑また空しからむとす。外観をのみ修飾して百年の計をなさざる国家の末路は即かくの如し。自業自得天罰観面といふべきのみ。

ここに典型的に現れている、震災を天罰・天譴とみる議論は、松山巖が分析している通り、当時の識者の間での流行であった（『うわさの遠近法』）。同時に松山によれば、芥川龍之介は天譴論のいかがわしさを看破している。

菊池寛（「震災文章」）は、「震災は、結果に於て、一の社会革命だった」との鋭い見方を提示する。

③縮小された復興計画

もちろん政府も、震災復興に際して手をこまぬいたわけではない。そもそも国政のレベルでいえば、加藤友三郎首相の病没による山本権兵衛への大命降下という、まさに政変の真っ最中に震災が勃発したのであった。

震災復興を担当する内務大臣にベテランの後藤新平が就任した。後藤はつい半年前まで東京市長を務め、東京改造に意欲的であった。後藤にとっても、千載一遇のチャンス到来である。後藤は9月2日内相となるや、直ちに4項目の方針を定めた。

④都市改造とバラック賛歌

馬場恒吾（「破壊の日」『政界人物風景』）。

彼等とても元より立派な市街の出来る事に反対するのではない。併し彼等は立派な市街を要求する前に、彼等自身先づ活きなければならぬ。活きる為めには何か商売を始めねばならぬ。生活の根拠地を作らねばならぬ。バラックは人間が活きんとする力の表彰である。其活きんとする力は、政府の計画が出来ると否とに
関わらず、所謂東京市を作るのだ。

まさに馬場の言う「人間が活きんとする力」がみなぎって、後藤の復興計画と対峙した時、一見対立するかに見えたバラックの力と計画の力は、意外にも融合して震災復興を推し進めていったのではないか。